

美味しい
フェラーリ

"Delicious" Life with Ferrari



Ferrari California T



今回の旅に引っ張り出したカリフォルニアTは、素材やカラーを自由に選び自分だけの好みの仕様に仕立てられる、フェラーリ・テーラーメイドのプログラムによる一例で、デニム素材を用いた「インエディタ」プログラムが随所に施されていた。このカジュアル感や遊び心は他のモデルでは憚られそうだが、カリフォルニアTにはマッチするから不思議だ。

跳ね馬で行く、
“美味しい”を
求める小旅行

走

文●小倉 修
text by Osamu Ogura

写真●藤井元輔
photographs by Motosuke Fujii

写真 & 取材協力●ザ・ひらまつ ホテルズ & リゾート 熱海
車両協力●フェラーリ・ジャパン

フェラーリ、その魅力の本質はエゴイズムにある。レースをするためにクルマを作ってきた会社でありブランドであることは言うまでもない。レースを第一とする会社だから、世の中で最も速くて美しい特別なクルマを作る。このシンプルで潔いエゴイズムこそが、フェラーリの気品や躍動を生み、人々への憧れや畏敬の念を生み出してきた。しかし、21世紀に入って、取り巻く社会は大きく変わった。環境への配慮、グローバルな広がりとその多様な価値観などへの対応が無視できないものとなったきたのだ。エンツォ亡き後モンテゼーモロにより、大幅な品質向上や市場を見据えたクルマ作りで改革を行ない、現会長のセルジオ・マルキオンネが、フィアットを離れニューヨークで株式上場を果たしたこともその表れだろう。

カリフォルニアはそんな時代背景から生まれた。V8エンジン搭載のFR、電動ルーフトップを持つ2+2のクーペカブリオレ、とこれまでのモデルの在り方を変える、初めて尽くしの革新的な1台だ。このカリフォルニアの魅力の本質はなんなのか？と問われれば、エゴイズムと寛容性の融合であろう。最新カリフォルニアTで驚くのはツインターボユニットのスペックはもちろん、そのフィーリングだ。ターボラグを感じないのである。全域にわたりトルクを生み出し、ごく普通に走っていてもまず過給機の存在に気が付かない。もちろんいざ加速となると、怒涛のパワーがさく裂。しかし急激な盛り上がりは皆無で、神経をとがらせるような挙動変化もない。

また、ビジネスエクスプレスとして日常的に使えるユーティリティを持ち、痛快なスポーツカーにも爽快なリゾートクルーザーにも変貌するマルチぶりで、初めて乗ったとしても、すんなりと受け入れてくれる寛容性を持っている。既存の価値にとらわれず、自由で開放的な面白さ、そしてどんなシーンでもこなす懐の広さ。それがカリフォルニアTというクルマの醍醐味であり魅力だろう。



関東や中部圏のフェラーリ・オーナーであればご存知、ワインディングロードの名所・伊豆スカイラインの玄岳インターを降りて熱海方面に下る途中に位置する。熱海側のアプローチは若干坂がキツイところがあるので、車高の極端に低いクルマはご注意ください。敷地内に入れば、こんなところがあったのか!と唸らずにはいられない雰囲気。数寄屋造りの建物内はダイニングとラウンジ、そして西側に和室を活かした特別室『松の間』と『梅の間』からなる。

さて、そんな寛容性を持つカリフォルニアTで出かけたドライブ先を訪れることができた。2016年10月27日に誕生したばかりの『ザ・ひらまつ ホテルズ&リゾート 熱海』(以下ひらまつ熱海)だ。そう、東京・広尾にあるフランス料理の名店『ひらまつ』が展開するホテルで、伊豆の熱海と網代の間、ちょうど突き出た岬の高台にある。かつて個人所有だった別荘を改装しホテルとしたもので、コンセプトは"ヨーロッパの旅館"。大阪城や金閣寺の茶室などを復元してきた名工、故・木下孝一棟梁による数寄屋造りの家屋を活かしながらテラスや水辺を新たに配し、モダンな客室ビルディングを増設した。部屋は13室で、全てオーシャンビュー。開放的な温泉風呂も備わる。その佇まいは確かに旅館的だが、先鋭的なインテリアデザインで知られるGLAMOROUS co.,ltdの森田恭通氏が内装設計および建築ディレクションを行なうなど、本格的なスモールラグジュアリーホテルと呼べる内容だ。

ここの素晴らしさは相模湾一望の眺望、そしてフェラーリの魅力にシンクロするかのような五感を刺激する芸術的な空間、そしてテイスティな食やサービスにある。大きな梁をはじめ貴重な木材を使った数寄屋造り家屋は、それだけで非日常感たっぷり。重厚な玄関で迎えるのはフィン・ユールの優しさあふれるチェアと大きな書画。和と洋のハーモニーはここから始まる。パブリックスペースには随所にアンティーク家具や精密な帆船模型がさりげなく配され、ミロの絵画が数多く飾られる。広尾にある『ひらまつ』がそうであるように、まるでプライベート美術館のような芸術性の高い空間だ。しかも、窓の外は房総半島や大島を望む絶景である。

落ち着きある空間にスパイスを効かせてるのは、日本画家の故・片岡球子の富士山の絵画。さりげなく贅沢、そして遊び心も感じさせる空間は居心地よい。きらめく海を眺めながら誰にも邪魔されずゆったりと風呂に浸かるひとは格別。特に夕暮れ時は最高だ。

癒

跳ね馬で行く、
"美味しい"を
求める小旅行

和室の特別室(右頁中段2点と右下の浴場)やコーナースイート以外は、ベッドルームとリビング、そして温泉風呂のある広大なバスルームが一連となる作り。大理石や檜の風呂は自動で満たされ24時間入ることができ、レインフォレストシャワーも備える。肌ざわりの良いシーツにタオル、そしてブルガリのアメニティと備品も最上級のものを用意。

フェラーリにシンクロするかのような
芸術的な空間が五感を刺激する

美味しい
フェラーリ
"Delicious" Life with Ferrari



食。

跳ね馬で行く、
“美味しい”を
求める小旅行



美味し
フェラーリ
"Delicious" Life with Ferrari

ひらまつ熱海の最大の楽しみ、それはもちろん料理にある。

正統的なフランス料理を数寄屋造りそして絶景を眺めながらいただくのだから、それだけでも特別というもの。シェフは『ひらまつパリ店』で修行を重ねた三浦賢也氏。「地のものだけにこだわらず、旬の最上ものを日本や世界各地から取り寄せて作る」という三浦シェフの料理は、繊細で芳醇な味わいのもばかり。見た目もアーティで、五感に響く。ひらまつ独自のルートで輸入される蔵出しのワインの数々も楽しみのひとつだ。

正当なフランス料理というどこか襟をただして臨みがちだが、ここは違う。リラックスしながら心行くまで味わえるのがいい。女将の荒井さん以下、スタッフの皆さんも気さくで温かく、ホスピタリティに優れているからだろう、まるで家族の団欒のように接してくれるのが嬉しい。「レストランと違って帰らなくていいですから、料理もワインも温泉も心ゆくまでゆったりとお楽しみ下さい」という女将の言葉に甘えるのが、おそらく一番正しい過ごし方だ。なお、高級旅館とは一線を画す朝食も絶品である。

選び抜かれた素材、趣向を凝らした料理そしてこの空間、そのすべてが芸術的で、『ひらまつ』ならではのゆるぎないこだわりが息づく。そこに人は惹かれ、憧れるのだが、その一方、お高くとまらず、優雅で温かなホスピタリティで気持ちよく受け入れるサービスや、人を和ませる景色がここにはある。美や表現へのこだわりはこうした利己的なエゴイズムが必要だが、その想いを他者に広げるには寛容な優しさが伴わなければ伝わらない。

ひらまつ熱海は、その融合が生み出す、絶妙の心地よさを感じる場所であり、短いステイだったが、どこかフェラーリ、そしてカルフォルニアTと通ずる空気を持つ宿だったのである。

左がダイニング、右がフロントの代わりになるウェイトिंगスペース。ご覧のようにどちらも房総半島や大島を望む絶景となっており、これは全部屋でも同じことが言える。今回のメニューは12月初旬時点でのお勧めで、季節や素材によって変化する。



INFORMATION

- ザ・ひらまつ ホテルズ & リゾーツ 熱海
- address: 静岡県熱海市熱海 1993-237
- phone: 0557-52-3301
- HP: <http://www.hiramatsuhotels.com/atami/>



Gelée de Canard Fumé et d'Ormeau,
Crèmeux de Celeri-rave et de Pomme, avec Caviar
鴨胸肉の燻製と島原産黒鮑
根セロリと林檍のクリーム キャビア添え



"Nodoguro" Grillé, Poireau à la Champagne,
"Ebi-imo" et Truffe d'Automne, Sauce Béarnaise
長崎県五島産ノドグロのグリレ
シャンパン風味のポロ葱 海老芋と秋トリュフ
ソース・ペアルネーズ



Pigeon Rôti, Poire Tatin,
Risotto à la Truffe Blanche, Jus de Pigeon
フランス ランド産小鳩のロースト 洋梨のタタン 白トリュフのリゾット
シンプルなジュソース



選
び
抜
か
れ
た
素
材
、
趣
向
を
凝
ら
し
た
料
理
そ
し
て
こ
の
空
間
、
す
べ
て
が
芸
術
的